

地域研究としての日本研究

柴 宜弘 (城西国際大学)

はじめに

本日は、私が現在勤務している城西国際大学と交流協定をもち、密接な学生交流を続けているエトヴェシュ・ロラード大学の皆様の前で、お話できることをとても光栄に思っています。このような機会を与えてくださったメチ・ベアトリクス学科長、パップ・メリンダ先生をはじめとする日本学科の皆様、そして国際交流基金ブダペスト日本文化センターの多田所長および三宅さんに、まずお礼を申し上げます。

私は大学院で東欧地域研究を専攻し、1975年から77年まで旧ユーゴスラヴィアの首都にあるベオグラード大学に2年間留学しました。その時、ブダペストに留学していた大学院の友人を訪ねて当地に初めて来ました。その後、1989年7月に一ヶ月間、ハンガリー科学アカデミーの歴史研究所に短期留学したことがあります。体制転換直前の興味深い時期で、ブダペストだけでなく、セゲドやペーチにも調査に行ったことを懐かしく思い出します。ユーゴスラヴィア紛争の時期には、制裁措置のため首都ベオグラードへの国際線の運航がなくなってしまう、ブダペストがユーゴスラヴィア行きの玄関口になりましたので、ここからバスでベオグラードに向かいました。この時期、セルビアのベオグラードからクロアチアのザグレブにも直接行けなくなり、ベオグラードからバスでハンガリーのペーチに向かい、そこでクロアチアからのバスに乗り換えてザグレブに向かいました。14時間ほどかかった記憶があります。2004年には、外務省の派遣で草の根無償の実施評価のためにブダペストを訪れたこともあります。今回は久しぶりのブダペスト滞在です。

本日は、グローバル化する時代において、日本研究を含む地域研究を行なう意義や問題点について、東欧地域研究者としての自分の関心をお話ししながら講演を進めてゆくことにします¹。

¹ この講演は2016年2月18日、国際交流基金ブダペスト日本文化センターの主催により、エトヴェシュ・ロラード大学日本学科の学生・教員を対象にして行われた。

1. 日本における地域研究

地域研究 Area Studies という学問分野は、第一次世界大戦後、イギリスやアメリカで始められました。現代において学問の専門化や細分化が限りなく進み、その社会的な意味が見失われてしまいつつあることに対する反省から、現実社会との係わりを見据えて生みだされた学際的 interdisciplinary な研究分野が、地域研究と言えます。地球上のある地域や国を切り取り、そこに住む人々の文化や社会を研究対象として、全般的な異文化理解を目指すだけでなく、個別化する既存の研究方法に再考を迫るものでした。社会科学と人文科学の総合化が目指されましたが、どうしても社会科学的な色彩が強まってしまう傾向にありました。

また、第二次世界大戦後の冷戦時代に、アメリカでは地域研究が国家の戦略と結びつき、「敵国」研究として、あるいは「発展途上国」研究として進められました。こうした傾向に対して、20年ほど勤務した東京大学大学院総合文化研究科（Graduate School of Arts and Sciences）の地域研究は、学問の総合化を強調する意味で「地域文化研究」という名称を用いています。しかし、「地域文化研究」の英語表記は Area Studies です。

現在、地域文化研究は日本のさまざまな大学で学ぶことができますが、日本で初めて地域研究を教育組織に取り入れたのは、東京大学の教養学部（Faculty of Arts and Sciences）です。1951年のことで、当初はアメリカ、イギリス、フランス、ドイツの4地域から発足しましたが、その後ロシア・東欧、日本を含むアジア、ラテン・アメリカに拡大しました。大学院の総合文化研究科に地域文化研究専攻が設置されたのは、1983年です。

アメリカの第二次世界大戦後の地域研究と違って、教養学部 の地域研究は次のような三つの特徴をもっているといえます。第一は、「敵国」研究として始められたものではありませんので、基本的には「実学」としての政策科学ではなく、人文科学の色彩の強い「虚学」の文化研究として発展しました。ここでは、文化は政治や経済などの人間の営みを含みこむ広い概念として考えられています。ですから、東大の地域研究は「地域文化研究」と称されています。

第二は全体性、学際性、そして現代性を重視する研究だということです。これは、既存の学問分野やディシプリンに基づく地域への取り組みとは異なるもので、日本の地域研究の大きな特徴といえます。

第三はそれぞれの地域を、あくまでも世界全体との関連で捉える志向性が強いことです。自然地理学的な観点から地域を不変的なものと考えてのではなく、歴史的な視点を取り入れ、新たな課題の視点を組み込んで、地域の設定を固定しない研究姿勢が共有されています。あとでふれますように、地域は可変的なものだからです。最近の地域設定としては、きわめて現代性の強いイスラーム地域研究、また、陸ではなく海の視点を取り入れた地中海地域研究などがあげられます。

2. ヨーロッパ日本研究協会 (European Association for Japanese Studies, EAJS)

2014年8月末、スロヴェニアのリュブリャナ大学哲学部でヨーロッパ日本研究協会 (EAJS)²の第14回大会が開かれました。私は3年に一度のこの大会に初めて参加しましたが、欧米諸国そして日本から800人を超える日本研究者がリュブリャナに集まりました。大会開催時には、日本人研究者もかなり参加していたようで、小さなリュブリャナの町のあちこちで、日本人研究者らしい人とすれ違いました。

この大会について、少しふれておきます。この大会に参加した研究者や大学院生は日本研究者ですので、日本語に精通しているのだと思いますが、大会の報告言語は基本的に英語でした。日本研究の学会なのだから、報告は日本語で行うべきだとの考え方もあるでしょう。日本研究に限らず、地域研究を行うために現地語を習得することは当然のことです。しかし、日本研究の分野によっては、日本語の精通度に違いがあっても不思議ではありません。例えば、社会科学的问题関心から日本を研究対象として、他の地域と比較する場合、国際語としての英語を使う比重が高まることになるでしょう。

² ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)のウェブサイトは以下の通り。
<http://as.ff.uni-lj.si/eajs/programme>

私はこの大会の日本史関連のセッションに参加してみました。日本ではこれまで、日本史の研究者は日本語だけで研究を発表することが多く、積極的に英語などの外国語で成果を発表することはまれでした。しかし、この大会には若い日本史研究者がかなり参加していて、英語で成果を報告する様子を目の当たりにしました。かれらが日本史を世界史の中に位置づけて、欧米の日本史研究者と議論する場面を見ながら、時代は少しずつ代わってきていることを実感し、感銘を受けました。日本史を独自の発展を遂げた歴史であり、外国人研究者には理解できないなどという時代は終わっています。英語をツールとして、多くの成果の蓄積を国外に発信することが必要でしょう。

日本研究はかつての言語・文学中心の「ジャパノロジー」ではなくなっています。ESJS リュブリャナ大会のプログラムを見ますと、報告は10部門と学際研究のパネルからなっています。学際研究パネルでは、「変化する食習慣と農業製品システム」と「福島原発事故」といったアクチュアルな問題が扱われ、様々な研究分野から議論が行われました。10分野は、①都市・地方・環境研究、②言語・言語学、③文学、④ヴィジュアル・アート、舞台芸術、⑤人類学・社会学・メディア学、⑥経済学・経営学・政治経済学、⑦歴史学、⑧宗教学・思想史・哲学、⑨政治・国際関係、⑩日本語教育です。

この10部門からわかるように、現在の日本研究はきわめて多様です。日本語を学んでいる皆さんも様々な動機から、日本学科に入学されたことでしょう。しかし、地域研究としての日本研究はさまざまなアプローチが可能です。日本語を学んでどうするのか、改めて考えることが必要ではないでしょうか。言語や文学だけでなく、国際化する現代において、広く現在の日本社会が直面する様々な問題に関心を持ってもらいたいと思います。その際、皆さんが生活しているハンガリーとの比較はとても重要な視点だと思います。

つぎに、私が考える地域研究について、簡単に述べてみたいと思います。

3. 地域研究と私

個人的な話になりますが、地域研究者を目指すことになった背景について少し説明することをお許してください。私は大学の学部時代に国際関係論を専攻

しました。1960年代後半に国際関係論を勉強した頃、学際的な新しい学問分野であった国際関係論は国際政治、国際法、国際経済を三本の柱として、これに国際政治史、国際機構論、比較文化論、世界地誌を含めて構成されていたように思います。これらを学んだ上で、地域研究の講義を受けるように、カリキュラム編成がなされていました。大ざっぱに言ってしまうと、国家、国際機構、NGOなどのアクターとアクターとの関係を理論的に学ぶ学問が国際関係論であり、これが理論倒れにならないようにするために、国際関係が展開する場の現実を見据えた学問として地域研究が設置されていました。

車の両輪にたとえることのできる国際関係論と地域研究は学際的な学問分野であり、現代世界の様々な事象を政治、法律、経済、社会、文化といった面から研究するのだということは理解できましたが、国際関係論や地域研究の方法論とは何かについては十分な説明はなく、よくわかりませんでした。既存の学問分野の集合体にすぎず、そもそも独自の方法論などはないのか、担当教員に尋ねても、「私の専門は国際政治学です」とか「私の専門は国際経済学です」とか「私の専門は比較文化論です」と言って、自分の専門分野に逃げ込んでしまい、国際関係論や地域研究の方法論について答えてはくれませんでした。こうした傾向はそれから40年近くが経過し、自らが地域研究に携わりかなりの年数が経った現在でも見られることです。

国際関係論を学ぶ学生時代に、私は東欧とくにユーゴスラヴィアという国に強い関心をいだくようになりました。東欧という地域を研究対象としてより深く研究してみたいと考えて大学院への進学を決断しました。当時、東欧を社会主義経済の視点から対象にする研究者は多数いましたが、地域研究の対象として東欧を考えようとする研究者はあまり見当たらず、東欧史の専門家がいる大学院に進学しました。地域研究の方法論として歴史学を強く意識していたわけではなかったのですが、東欧の歴史を学ぶなかで、地域の現状を考える上でその地域の歴史がもつ意味の重要性を認識するようになりました。歴史を踏まえない現状分析は表層をなでるだけのものにすぎず、歴史学が地域研究の強い武器になることを実感しました。私は歴史学を身につけ、同時に国際関係論の手法に頼りつつ東欧、最近ではバルカン（南東欧 Southeast Europe）を対象として地域研究を続けています。

バルカン地域研究者として、現在、私が関心をもっているのはバルカン諸国の歴史教科書です。なぜ歴史教科書に関心をもつようになったかといいますと、契機はユーゴスラヴィア紛争です。ユーゴスラヴィア紛争は旧ユーゴ地域を分断しただけでなく、周辺のバルカン諸国にも多大な影響をおよぼし、バルカン諸国をも分断してしまったといえます。

1995年にボスニア内戦が終結すると、ユーゴ紛争で分断されてしまったバルカンを一つの地域としてとらえ返し、共通の歴史認識をつくることでこの地域の対立を超えようとする試みが生じました。これは、歴史教育や歴史教科書を通じて和解を目指す興味深い試みです。バルカン諸国の歴史教科書は自国・自民族中心的であり、近隣の民族やエスニック集団に対する不寛容さを映し出していました。何よりも特徴的なのは、隣国や隣人に対する否定的あるいは敵対的な態度を生み出すような叙述がなされていました。ユーゴスラヴィア紛争に伴いバルカンで吹き荒れたナショナリズムへの対抗概念として、近年、ヨーロッパ共同体になぞらえて「バルカン共同体」という考え方が生み出されています。この考え方から引き出されるバルカン地域史はバルカン共通の文化的遺産や制度面での遺産に基づいて構想されるもので、各国のナショナルな歴史教科書に対抗させることができると考えられます。

1998年に、スロヴェニアからキプロスまで含めたバルカン諸国11カ国（現在は、モンテネグロとコソヴォを含む13カ国）の歴史家と歴史教育者約60人によって始められた共同歴史プロジェクトは以上のような考えに基礎を置くものでした。バルカン諸国のナショナル・ヒストリーを統合したり、それに基づく各国の歴史教科書を排除したりすることを目的とするのではなく、ナショナル・ヒストリーや歴史教科書に対抗する中等学校生徒向け（ギムナジウムで学ぶ15—18歳）の共通の史料集を副教材として作成し、歴史教育の方法を変革することが目指されました。歴史家と歴史教育者との共同の作業、例えば各国の歴史教科書とカリキュラムの比較分析、歴史教員の研修が繰り返されて、バルカン近現代史の4つのトピックス、「オスマン帝国」「民族と国家」「バルカン戦争」「第二次世界大戦」が選択され、4冊の史料集がまず英語で2005年に出版されました。現在、続編として「冷戦」と「ユーゴスラヴィア紛争」の2冊の刊行が準備されています。

これら 4 冊の共通歴史副教材は現在までにセルビア語版、ギリシア語版、クロアチア語版、ボスニア語版、マケドニア語版、アルバニア語版、モンテネグロ語版、ブルガリア語版が完成し、セルビア語版は増刷されています。私たちが翻訳を進めた日本語版も 2013 年によりやく出版にこぎつけました³。これまでのところ、バルカン諸国のどの教育省も共通歴史副教材の使用を正式に認可してはいませんが、セルビア、クロアチア、ギリシアの教育現場ではこの副教材を使って授業を行う試みが続けられています。この共通歴史副教材はナショナル・ヒストリーに対抗させて、共通の歴史理解を作りあげることが意図しているのです、実際にバルカン諸国の教育現場で使われてこそ意味があるといえます。

日本のバルカン地域研究者からすると、東アジアの歴史の共通理解という観点からして、バルカンの地域史を構想する共通歴史副教材はつぎの 4 点で重要な意味を持っているように思えます。第一は、バルカン近現代史をヨーロッパ史や世界史の一部と捉え、そのなかで位置づけていることです。第二は、地域史の観点から、バルカンの各国が隣国にいだいている偏見や差別やステレオタイプを排除しようとしていることです。第三は、自国中心的な視点ではなく、比較史の観点からさまざまな立場の史料が収められており、ナショナル・ヒストリーを相対化する地域に対する視点を明確に打ち出している点です。第四点は、バルカンの共通面だけに基づいて地域史を理解するのではなく、共存と対立の複合物として共通の歴史を示そうとしていることです。

これらの 4 点は、東アジアに生きる私たちが共通の理解や認識の場として自らの地域を設定し、それぞれのナショナル・ヒストリーを相対化してみる上で、大いに参考になるように思われます。中欧に生きる皆さんはどのように考えるでしょうか。

4. 地域研究の方法

³ 日本語版は、クリスティナ・クルリ総括責任、柴 宜弘監訳『バルカンの歴史——バルカン近現代史の共通教材』明石書店、2013 年。

自分の話が長くなってしまいましたが、いまだにはっきりしない地域研究の方法論を考えてみることにします。その前に、わかったようでいて必ずしも明確ではない、「地域 region」について述べてみたいと思います。先ほど述べましたように、国際関係が展開する場として「地域」を考えた場合、「地域」は現実に存在する国民国家の規模にとどまらず、国家を超えた規模でも、国内のローカルな「地方」の意味でも成り立ちます。それでは、「地域」を成り立たせている要因は何でしょうか。ヨーロッパのイギリス、フランス、ドイツといった国民国家の規模を念頭におくと、一般的に考えられる要因は地理学が規定する同質性によるまとまりです。この場合ですと、英語、フランス語、ドイツ語といった言語がそれにあたるでしょう。

しかし、「地域」は国民国家を超えた規模でも成立します。「地域」の大区分としてアジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカという規模、あるいは、中規模の区分として私が対象とするヨーロッパのなかの東欧やバルカン、アジアのなかの東アジアあるいは北東アジアなどが考えられます。これらの「地域」は言語の観点からみて同質ではありません。宗教を考えても民族を考えても様々です。むしろ、異質性の方が強いとさえ言うことができます。例えば東欧という地域は言語、宗教、民族ともにきわめて多様です。東欧が「地域」として成立するのは西欧との関係性において一つのまとまりをもっているからに他なりません。「地域」としてのまとまりを成り立たせている要因は言語、宗教、民族上の同質性の場合もありますが、異質性が強くても、相互の依存関係が強ければ「地域」としてのまとまりをつくる場合もあるのです。「地域」は同質性と異質性の上に成立すると考えるべきだと思います⁴。

グローバル化が進行する一方、局地的な紛争が絶え間なく生ずる現在において、このような「地域」を統一的な基準で規定することは不可能でしょう。ですから、「地域」とはそれぞれの研究者の問題関心がいかなるものかによって設定されと言わざるをえません。例えば、私は国民国家を相対化して考えてみるという問題関心から、現在はバルカンという地域を研究対象としています。

「地域」の捉え方がそれぞれ異なることを前提とした上で、地域研究の方法論

⁴百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年、212－225ページ。

を次の3点から考えてみます。

まず、ある「地域」を対象として研究するには、その地域や国家を全般的に見る必要があるという問題です。ある「地域」の政治、経済から社会、文化まで全体的な展望を持つことが重要です。このためには、対象とする地域での現地体験と現地語を駆使する能力が必要不可欠の要件となります。地域研究に際して、現地語を知らずに外国語のみで行うと、対象地域の実情を色眼鏡で見ることになりかねません。例えば、日本の東欧地域研究を考えてみますと、1960年代前半までは日本から社会主義の東欧諸国に留学することはできませんでした。ですから、それ以前の時期の東欧地域研究は東欧諸国の現地諸語を使うことなく、英語とロシア語で済ませてしまうといった研究状況がありました。

また、ある地域の問題について、例えば政治や経済に特化して研究する際にも、社会や文化にまで視野を広げて考察する姿勢が欠かせません。何度も繰り返しますように、地域研究は学際的で複合的な研究分野なのです。

第二に、すでに少しふれましたが、研究対象とする「地域」を自然地理的な区分による不変のものとして扱うことができるのかという問題です。対象とする地域や国家がもつ「地域性」なり「国民性」を考える時、それを不変のものとして安易に捉えることはできません。ここに時間軸を組み込んで考察せざるをえません。ある地域や国家の社会がもつ価値体系は歴史的に変化するものなのです。東欧の例をあげてみますと、東欧諸国は第二次世界大戦後、社会主義体制を築き、それから40年後の1989年の体制転換を経て、社会主義体制が崩壊し社会の価値体系が激変しました。この地域の現状を研究する上で、歴史的な理解は不可欠のものなのです。このことは一般的に言えることだと思います。

この問題と関連して第三に、研究対象とする地域を国際環境の影響を考慮することなく扱うことができるのかという問題です。東欧で言えば、1970年代末から80年代にかけて「鎖国政策」を掲げたアルバニアは例外でしょうが、どのような「地域」を対象とするにせよ、いかなる時代でも近隣諸国や国際環境の影響のおよばない状況は考えられません。東欧という地域概念が西欧との関係において成り立つと先に述べたように、ある「地域」を研究するには、他の地域との比較や関係が重要な方法です。そして地域間の関係性を理解するには、歴史的な視点がきわめて有効なものとなります。

このように考えてくると、地域研究の方法論とは現地語を駆使すると同時に対象を複合的なディシプリンから全般的に見ること、比較の視点を取り入れ関係性の理解を深めること、そのために、歴史的な考察を十分に取り入れること、と取りあえずまとめることができるでしょう。また、広範な「地域」を網羅する地域研究は、基本的に共同研究にならざるをえないことも付け加えておきたいと思います。

5. 今後の日本研究

最後に、東欧あるいは中東欧で、地域研究としての日本研究を進めるうえで必要と思われることについて、バルカン地域研究者としての私見を述べてみたいと思います。

日本研究を進める際、日本語教育の重要性と教育カリキュラムの充実は言うまでもありませんが、これまで、研究の対象が日本語研究や日本文学研究に偏っていたような気がしてなりません。日本とのさまざまな交流が西欧諸国と比べて少ない中東欧諸国の人たちにとって、日本語の学習が並大抵なことではなく、学習を深めるなかで日本語の魅力や、それと関連して文学に強い関心が向けられるのは十分に理解できます。

しかし、地域研究として日本研究を考えたとき、対象とすべきテーマは大きく広がります。日本語をしっかりと身につけたうえで、ディシプリンとして言語学、文学だけに目を向けるのではなく、歴史学、政治学、経済学、社会学、メディア論、国際関係論などにも関心を向けることが重要だと思います。環境や自然保護の問題を考えると、理系の分野も考えなくてはなりません。

この点で、日本学科が単独の専攻でなく、ダブルメジャーだと効果的であるように思われます。日本語に加えて、多様なディシプリンを身につけることができるからです。私がよく知っているリュブリャナ大学文学部の日本研究専攻の場合を例にあげてみましょう。ここでは、1995年の日本研究専攻発足当初から、ダブルメジャーが採用されています。現在は、日本語だけのシングルメジャーも可能とのこと。ダブルメジャーのある学生は、リュブリャナ大学社会科学部で国際関係論を専攻すると同時に、日本研究専攻で日本語を

学びました。卒業論文では英語の文献に依拠して国連と日本を扱い、その後、留学生として東京大学総合文化研究科の国際関係論の大学院に進学して、修士論文では日本語文献も駆使して国連と日本外交を扱いました。博士論文では、第一次世界大戦期に中国から日本に捕虜として連れてこられたハプスブルク帝国のスロヴェニア人、セルビア人、クロアチア人の帰国後の国籍選択問題を扱い、学位を取得しました。日本語の史料を読み込むことができるほど、日本語がよくできますが、修士論文も博士論文も英語で執筆しました。皆さんもそれぞれの関心に沿って、日本語だけでなく歴史学や経済学や社会学や国際関係論などの基礎を身につけておく必要があります。

さて、グローバル化時代において、特異な国、日いずる国に対するエキゾチックな関心や戦後の急速な高度経済成長といった観点からの日本研究は、いささか時代遅れの感じがします。現在の「クール・ジャパン」もよいですが、世界がかかえている共通の社会問題に日本も直面しています。日本史の分野で言いますと、これまでは日本の歴史の発展は特殊で、欧米とは異なるという側面が強調されてきましたが、リュブリャナでの EAJJS の大会での様子を先に話したように、最近では、日本の近代の歩みを東アジア史や世界史のなかにいかに位置づけるかという視点が重視されています。世界史のなかでの日本史の相対化が一般的になっています。

こうした大きな変化は、従来とは違った関心から、地域研究としての日本研究を進める契機になるかもしれません。「特殊な国」ではない日本を対象にする研究には、比較や関係の視点がいっそう組み込みやすくなりますし、研究の幅も広がります。日本を東アジアのなかに位置づけることが、これまで以上に必要になるでしょう。共通語としての英語の重要性も高まるかもしれません。

このように普遍化すると同時に多様化する日本研究を、一大学の日本学科が個別に行うことには無理があると思います。そもそも、全体的、学際的な地域研究は共同で取り組まざるを得ない側面をもっています。各国・各大学の日本研究には得意な分野があるので、それぞれの利点を生かして、共同で教育・研究に取り組むことが肝要です。このために、近隣の南東欧諸国も含めた中東欧諸国の日本学科、日本研究機関、日本研究者のネットワークを構築することが喫緊の課題となります。

今回、ブダペスト日本文化センターの主催で「中東欧日本研究機関ネットワーク会議」が開催される運びになったことは、この地域の日本研究にとって、大きな前進と言えるでしょう。この会議を契機として、日本研究機関の人的交流の促進、日本研究に関する授業の単位互換制度や博士論文の共同審査制度の確立などが、これまで以上に進むことになると思います。

まずは、中東欧諸国の日本学科や日本学専攻コースのあいだに緊密なネットワークが築かれ、地域研究としての日本研究が進展することを期待しながら、私の講演を終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。